

「聖岳洞穴調査」

ボランティアの記(2)

矢野 徳 彌

(会員 南海部郡本匠村)

六 学術調査の成果

今回の聖岳洞穴の学術調査は予定通り十二月二十四日に終了したが、重要な作業はすこし早く終わっていたので、それに先立つ十二月二十日の夕刻、現地で記者会見が行われ調査結果が報告された。

其の内容は翌日の新聞テレビなどで大きく報道され、また同夜本匠村山村開発センターで開催された調査団による学術講演会で詳しく説明されたので、ご存知の方も多いと思われるが、此の調査にかかわったものの一人として、あらためて其の成果を検討して見たい。

(遺物の出土状況)

今回の調査の結果、前回と同じ旧石器時代後期(一万四、五千年前)の人骨四点と石器二点が出土した。其の状況は次のようである。

● 頭骨の一部

入口から五メートル程の場所 で出土。

(付図①)

縦一・九センチ、横

二・一センチ

● 肋骨の一部

同じ場所より出土。(付図②)

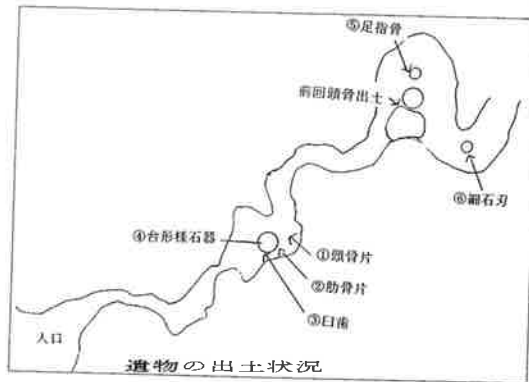
幅一・四センチ、長さ三・六センチ

● 上顎の大白歯

同じ場所より出土。(付図③)

幅一・一センチ、長さ一・八センチ

● 黒曜石製の台形様石器



前記の肋骨片と重なって出土。(付図④)

### 三・三セ幅

#### ●足中指の骨

前回の調査で頭骨の発見された地点から約二メートル離れた場所<sup>(5)</sup>で出土。(付図⑤)

幅一・〇センチ、長さ二・四センチ

#### ●黒曜石製の細石刃

同じ場所<sup>(5)</sup>で出土。

#### (出土遺物の検証)

今回の調査で発見された遺物を見て先ず感じられたことは、「旧石器時代の人骨が、石器を伴って出土した」と言う前回調査の成果を改めて確認するにとどまり、残念ながら日本人のルーツを明にするほどの遺物の発見には至らなかった」ということである。

出土した遺物について少し検討して見よう。

#### A 人骨

- ①出土の場所から見て、前回と同じ個体のものである可能性が高い。
- ②いずれも小さな骨片で、個体の形質的な特徴を見いだす余地がない。ただ臼歯の一本はこの個体について

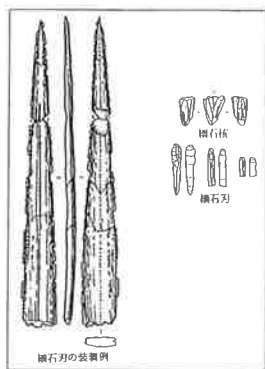
なにかの情報をもたらしてくれるかもしれない。

人骨であれ獣骨であれ、長い期間土中に残る条件は極めて厳しい。どのように保存に適した場所であっても、何千年、何万年の間には密度の低い部分から溶解が進み、形は壊れ、容積は少なくなり、やがて消失する。聖岳洞穴の環境が、骨を維持してくれる時間も限界に近づいているのか、これまでに発見された人骨はすべて部分骨の小片で、個体の特徴を推定するには、あまりにも情報が少ない。

今回はせめて顎の骨とか、ある程度の長さの手または足の骨、あるいは骨盤など、形質の特徴のつかめる遺物が出てほしかった。

#### B 石器

前回の調査では、鐘乳石落下地点から頭骨片とともに細石刃と細石核が、またそれより三メートルばかり奥に入った地点から台形様石器と石核が



出土しているが、今回は

鐘乳石のすこし奥から

細石刃 一点

入口から五メートルの新たな場所から

台形様石器 一点

が発見された。此の石器について橘昌信教授は、

台形様石器は、作り方が前回出土のものと同じだが、製作年代はほぼ同じ。

細石刃は今から約一四〇〇〇〜一二〇〇〇年の間使用されているが、この形は其中最も古い年代のものと話している。

台形様石器を含むナイフ形石器は、旧石器時代後期を代表する石器で、今から約二五〇〇〇〜一五〇〇〇年前に登場し、その後細石刃石器群の出現により消退したが、同じ場所から双方が出土したなどは、今回も解明されなかった。橘教授は「二つの石器類が此の洞穴に持ち込まれたのは、別々の時期と考える必要が出てきた」と言う。

### C その他の遺物

以上の二つは記者会見及び講演会の席上発表されたものであるが、先号にも書いたとおり念押しに行った残土の調査で、いくつかの興味ある遺物が発見された。

### ○子供の歯と骨片

私が参加した二回の作業でも、三・四個の小さな骨片と歯三本がでていたので、調査期間中にはもつと採取されたかもしれない。歯の一つは臼歯の歯蕾（生え変わり、永久歯となる芽）で、一つの歯には歯垢が付いていた。興味ある遺物である。しかし出土場所（調査団では掌握）に疑問があり、また年代が分からないので正式には発表されなかった。中世人骨の疑いが強い。

### ○炭化物

水洗いの段階で、粘土の中から数多くの炭化物が採取された。大きなものは無かったが、年代判定の重要な材料になると思われる。

### ○獣骨

地表部分ではコウモリの骨がたまに採取されたが、今回此の洞穴からヒト以外の骨は全くでなかった。調査に当たった名古屋教育大の河村善也教授によると、前回出土のツキノワグマの骨片も調べ直す必要があるという。

## 七 科学的調査への期待

このように、今回の調査のうち発掘調査では大きな成果が得られなかったが、出土した遺物、併行して行われた洞穴環境に関する調査データなどは、それぞれ担当した研究機関に持ち帰り、科学的な分析や研究が加えられることになっていたので、其の方面で新たな進展のあることを強く期待したい。

具体的にどのような科学的解明が行われるのか、専門家でないので詳しくは分からないが、少なくとも次の二つの部門では新しい発見があるものと考ええる。

- ・ 遺伝子レベルでの解析
- ・ 年代の判定

### (遺伝子調査)

三十七年前の時点では考えられなかった生物学的検査の方法として、遺伝子の解析技術がある。これを利用して古い人骨のDNA鑑定ができるとすれば、今回、聖岳人骨にもぜひ実施してもらいたい。これが地元本匠村関係者の強い要望である。調査団の意見では当然実施するということであった。

此の鑑定が行われるとすれば、少なくとも次のことが

わかるかも知れない。

イ、先の頭骨片やその他の骨片と、今回の頭骨片・肋骨片・臼歯は同一個体のものか。

ロ、先の頭骨片と上顎骨片は同一個体のものか。性別はどうか。

ハ、二つの人骨器と、頭骨片に近縁関係があるか。

ニ、先の中世人骨、新しく発見された子供の骨、其の間に近縁関係があるか。

### (年代の測定)

遺物、遺構などの絶対的な年代の決定は難しい。出土した層位や、そのものの形質、その他いろいろの資料から相対的に判断して推測するしかない。

聖岳の人骨は、形質の古さ、出土した地層の状況、鍾乳洞剥離痕の再生状況、石器の種類などから、一四〇〇〇〜一五〇〇〇年前のものといわれ、余りにも大まかであった。

今回は幸い粘土層から多数の炭化物が発見されている。

採取地点は掌握されているので、人骨近くのものがあれば、C14の解析で、かなり近い数値が算出されるのではないか。

また相対的な数値しか得られないが、新しく出土した子供の骨が中世人のものか、それより古いものかフッ素の含有比率である程度分かると思う。

## 八 聖岳人骨の問題点

日本列島における更新世人類化石は、これまで十数カ所で発見されているが、聖岳洞穴は、旧石器と人骨が同じ包含層から出土した唯一の事例として、貴重な遺跡である……(調査団)と言われるが、具体的には何を意味するのだろうか。

### (遺物としての石器の重要性)

前にも記したとおり、日本列島に限らず地球上のどの地域にあつても、長い年代にわたり骨が地中に残れる条件はきわめて厳しい。しかも年代が遡るほどその可能性は低くなる。

これに比べ人が使用した石器は、いつまでも土中に残り、次々と発見されて行く。

戦前までは、一〇〇〇〇年以前の日本列島は火山活動が激しく、とても人類が住める環境ではなかった……と考えられていたが、昭和二十一年(一九四六)群馬県赤城

山麓の赤土から黒曜石の石槍が発見(岩宿遺跡)されて以来、現在まで約四五〇〇カ所の遺跡から、数え切れないほど多数の石器が掘り出されている。

身近な所では昨年十一月、天瀬町五馬高原の高瀬Ⅲ遺跡から、約二八〇〇〇〜一三〇〇〇年までの年代に属するナイフ形石器や細石刃などが、四七〇〇点も出土している。

また古いものでは、宮城県築館町の上高森遺跡から、世界最古の六〇万年前の石器が発見されている。

このように各年代、各地域にわたる多数の遺物の出土により、その形、材料、製作方法などによる分類がなされ、その年代、移動の経路、分布の範囲及びその変動などの研究がなされ、いわゆる「石器の編年」が進んでいる。

其の成果は今回調査に見えられた春成秀爾、小田静夫先生ら(外に小野昭)の労作「図説・日本の人類遺跡」などで、私たちも知ることができる。

### (少ない人骨標本)

これに比べ、人骨の出土例はきわめて少なく、その一つ一つの標本がたいへん貴重である。日本本土ではわずかに四カ所(聖岳の外、静岡県三カ日町・浜北町、栃木

日本列島周辺の後期更新世人類化石出土地跡

遺跡名	所在地	調査	年代(数値は校正前・C年代)	出土人骨	出土遺物
山下町第一遺穴	沖縄県那覇市	1962-69	およそ 32,000	大腿骨・脛骨(7歳位)	石器?
ピンザブ遺穴	沖縄県宮古島	1982-84	およそ 26,000	数個体/歯髄骨・頭頂骨	骨髄・乳歯
淵田	沖縄県豊後高村	1969-70	16,600±650, 18,250±230	4個体(ないし9個体分)	
大山遺穴	沖縄県宜野湾市	1964	後期更新世の末期	右下顎骨片1	
結原遺穴	沖縄県北谷町	1966	後期更新世の後期?	歯茎骨片1	
カサバム遺穴	沖縄県伊江島	1935-62	後期更新世の後期?	頭頂骨片1	腰骨?
ブス遺穴	沖縄県伊江島	1976-77	後期更新世の末期?	成人下顎骨1	
下地遺跡	沖縄県久米島	1978-86	およそ 15,000 ~ 16,000	乳児骨1個体	
聖岳遺穴	大分県本荘村	1961-62	紀石器文化期 およそ 14,000	遠隔骨・前脛骨	緑石器・各種骨片
三ヶ日	静岡県三ヶ日町	1959-61	およそ 18,000より新しい	胫骨各断片	胫骨 大腿骨
浜北	静岡県浜北市	1960-62	およそ 14,000, 及び 18,000	前脛骨・前脛骨	上脛骨 胫骨
聖生	栃木県葛生町	1951	後期更新世の前期?	大腿骨2 中手骨 尺骨	
周口店上洞	河北省房山県	1933-34	およそ 1 ~ 2万年程?	少なくとも 8個体分	
龍江	広西壮族自治区龍江鎮	1958	およそ 4万年程?	頭骨・脛骨・肋骨	寛骨 大腿骨

遺跡からは、九個体分の骨が見つかり、其のうち四体はほぼ全体がそろっているのが、標本として非常に重要である。

港川人骨については、かつて紹介したことがあるので、詳しいことは省略したい。

県葛生町)、沖縄列島では八カ所(本土四カ所、伊江島二カ所、久米島、宮古島)しか出土していない。しかも、その大部分は小さな部分骨である。石器の編年に対応する各年代、各地域に居住した日本人の顔の形・体格など、その形質をうかがい知る資料としては、余りにも少なすぎる。

港川人は体長一五〇センチ前後と体格は小さい。しかし、これは三カ日人、浜北人にも通じ、また、中国南部の柳江人にも似ていると言い、一つの系統を予想させる中核になっている。

(異端の聖岳人骨)

これに対し聖岳人骨の多くは小さな骨片で、ただひとつまとまった形の頭骨片から、さわめて厚く、全体に古い形質をもち、縄文人には似ておらず、後頭部の隆起の形が特異で、クロマニヨン1号人骨や、北京周口店洞101号人骨に類似している(調査団資料)

とし、港川人とは別の系列に属すると推測されている。しかし、この見方に慎重な意見もある。

「その年代でも顔の形や体格に大きな個人差があったであろうし、聖岳人がたまたまその体格であったとすれば、どうなるのか?」というのである。

此のことを強く指摘したのは、今回の調査の視察にいられた国立科学博物館人類研究部長馬場悠男氏(形態人類学)の講演内容であった。同氏は、

世界各地で発見された古人骨や、わが国の縄文人骨、弥生人骨などの形態を比較して見ると、たとえ同年代、同一場所出土のものであっても、個体により顔かたち(頭骨の形状)や体格に大きな差異がある。

この人骨もきわめて特異な頭の形を示しており、山頂洞101号人骨に似ているが、これだけで直ちに日本列島から発見された他のヒトと、別の系列に属するとは決めがたい。

と主張する。傾聴すべき一つの意見であった。

#### (聖岳人骨の貴重さ)

馬場悠男氏の意見のとおりであったとしても、この人骨の価値に特別の変化があるわけではない。

旧石器時代のヒトの歴史が、主としてその残した石器によって語られている以上、どの石器とかわりをもっていたかが非常に重要である。

この人骨といっしょに出土した石器のうち、細石刃はその形状、製作方法(細石核から剥離の方法)などから日本列島に出現した細石器群の初期のもの(橋)とされているので、逆に言うとき聖岳人は、その石器の分布する一つの文化圏に所属していたと見ることができるといえる。一つの

座が定まっているということが、日本列島のほかの人骨に比べ特別に貴重なのである。

#### 九 おわりに

聖岳洞穴の二度目の学術調査が終わった今、これに関わった者の一人として深く感じることが、聖岳人のきわめて特異な形質を追求できる資料は、もうこの洞穴からは得られまい……と言うことである。

もし今後更に追求を行うとすれば、環境のよく似た周辺の洞穴から新たな遺物を探すしかない。

日本列島各地には未発見の旧石器人骨がまだ多く残されていると思うが、何らかのきっかけがあり、またかなりの確率で見つかる可能性がなければ、多額の経費を伴うことから発掘は難しい。

これまでの例から見ると、発見の場所は似たような保存環境をもつ一定の地域に集中している。浜名湖周辺や沖繩本島南部などがそれである。聖岳に連なる石灰岩地帯もそのひとつと考えられるのではないか。

調査の期間中、本匠村が一席設けたことがある。その席上春成秀爾、檜崎修一郎といった学者から、「宇津々

の愛宕神社あたりの地形が疑わしい」と聞かされたが、「周辺に洞穴はなく、よほどの可能性がなければ神社を動かすわけにも行かない」と、冗談に終わった。ただこの一帯に大きな関心はあると言う。

本匠村のある洞穴の一つから旧石器が見つかっており、その場所は調査団も把握しているので、将来最も有力な調査候補地となりそうである。

其のことを大きく期待して、報告を終わることとした。  
(終わり)

【参考文献】(前回掲示のもの省略)

- 一、調査結果を報じた十二月二十一日付の新聞各紙  
(大分合同・朝日・毎日・西日本)
- 一、学術講演会当日の資料

◆『ふるさとを語る―第一集 杖』

佐伯史談会

平成十年九月十日刊 A5判 一〇三頁

本書は民俗に造詣深い

五十川千代見会員がまと

めた労作である。五十川

会員は、「あとがき」で、

「佐伯史談会の年中行事

として行われている、ふ

るさとを語る会に参加し

ている内、今回の「杖」

について調査執筆を依頼

され、趣味の野菜作りもそこそこに、正月早々より聞き

取り調査のため、自転車を漕いで各町村を訪ね歩いた。

初めから話を聞く人の当てもなく、野良で働く人や、道

端で出合った人に話しかけ、多くの人達から親切に教え

てもらい、どうにかまとめることが出来た。」と調査の一

端を語っている。

本書では、佐伯市・弥生町・本匠村・直川村・宇目町

に伝えられている伝統芸能「杖」についてまとめる。序

文は汐月三代吉会長、編集とワープロは林寅喜会員。表

紙絵は保田善作画・表紙題字は酒江青峰。(矢野)

ふるさとを語る  
第一集 杖

